

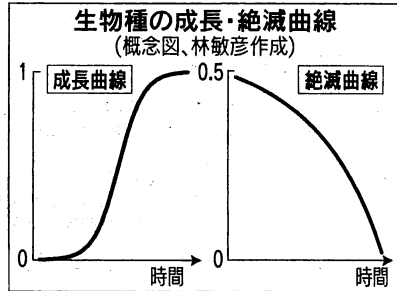
# ゼミナール

## 産業文化力が拓く

⑩

酒席での陽気な大騒ぎのことを「コンヴィヴィアリティ (Conviviality)」という。この言葉にかつて、社会批評家イヴァン・イリイチが新しい命を吹き込んだ。彼は世の中には人間を操作する社会制度とコンヴィヴィアルな社会制度があると示した。操作型の制度とは強制し、囲い込み人間を意図的に操るタイプで、産業社会に支配的な企業活動、交通政策、教育・医療制度などに広く見られる。

他方コンヴィヴィアルな制度とは、自由参加型で、ネットワークと共同作業を促し、持続的で、人間が独立しつつも他人と連携できる制度のことだとイリイチは言う。そのための道具として彼は通信技術に多大な期待を寄せた(「コンヴィヴィアリティのための道具」)。今でいえば、これには非営利組織(NPO)な



### 政策対応 参入障壁、今後も抑制を

境を超えてトランスナショナルに進行する。生物学はかなり前からこうした現象に気づいていた。種の個体数の変化はS字型の成長曲線を描くとされる。個体数がある値(壁)を超えれば種は急激に増殖する。一方、人間や天敵などによる捕獲率が高まると、あるところからその種の個体数は不可逆的に減り始め、絶滅に向かう。実はこれらの現象の根は一つである。一九七〇年代に経済学界では、種の増殖と同じ成長曲線を財の普及にあてはめ、ネットワーク効果と呼んだ。これはコンヴィヴィアリティの効果とも言え、今まさに文化市場で起きている。重要なのは極力、料金や資格などをめぐる介入・参入障壁のない状態を今後も保つことである。政官が「壁」を高くすれば、文化産業の飛躍的拡大は望めず、場合によっては衰退してしまいかねない。(スタンフォード日本センター)